構新調屋台　匠

大工	塩見 修一 氏	［塩見建築］
彫師	山下 継浩 氏	［山下木彫工房］
錺金具師	北角 和久 氏	［かざり金具きたかど］
縫師	川村 定弘 氏	［川村刺繍］
塗師	砂川 隆 氏	［砂川漆工芸］
太鼓師	真田 和典 氏	［真田太鼓屋］

新調構屋台

今回の新調屋台は数えて六代目となります。

新調にあたり「津田天満神社」・「構町」にこだわるというコンセプトで、木彫刻・錺金具・刺繍・太鼓等の部会毎に各部材の仕様を検討しました。

大工棟梁は町内在住の塩見修一氏です。

正面から見て中心の屋根に菅原道真公の御神紋「梅鉢」、右の井筒端に津田大年神の「左三つ巴」、左に賀茂別雷神の「二葉葵」の御神紋を配し、神社拝殿内の三柱の神様と同じ並びになっています。
さらに屋台正面中央に「金幣」を置き、井筒端の下場金具には日月旗をイメージした「金烏」・「玉兎」を配しています。
また、幣額は神社大鳥居の神額を参考にさせていただき追い龍の額縁に「天満宮」の文字をいれています。

幣 額

津田天満神社の大鳥居の神額を参考にし、追い龍の額縁に「天満宮」の文字を配しています。
追い龍のデザイン・天満宮の書体共、神額のものを模しています。

「津田天満神社・大鳥居の神額」

正角 ／ 斗組･肘木端

【 正 角 】

斗組の外側にある部材のことで、美しい彫刻が施されるのが一般的です。新調屋台の正角彫刻は四霊獣のうち陸の王者とされる「麒麟」を上部に、空の王者とされる「鳳凰」を下部に配しています。

【斗組・肘木端】

斗組は科栱とも呼ばれ柱の最上部に設置される木組みのことで、斗と肘木によって構成され軒桁を支える部位です。それぞれの部材に力を分散させ屋台にかかる衝撃を緩和させる働きがあります。通常、欅などの木材が使われますが今回の屋台では桜材を使用しています。肘木端には正面・振り面の唐獅子と牡丹が彫刻されています。

木彫刻

【 脇棒受け 】

脇棒を支える部材です。脇棒受けは泥台に固定されており、脇棒を支えるとともに屋台が倒れた際に練り子が挟まれないように傾きを止める役割もあります。また美しい彫刻が施される場合が多く、構屋台では道真公ゆかりの「梅」が彫られています。

擬宝珠

神輿屋根型屋台の天頂に取り付けられる宝珠を模したものです。
通常、宝珠部・かさ首・伏鉢の３つの部分で構成される。
今回の新調にあたりサイズをやや大きくしています。
特に伏鉢部分は高さを上げています。

紋

新調屋台の大きさが三尺になったことに伴い、サイズが少し大きくなっています。
四面共氏神・津田天満神社の御神紋である「梅鉢」を配しています。

総才端

昇総才の先端部分に取り付けられる木口装飾金具です。
側面は透かし彫りに応龍（飛龍）の錺金具を置いています。
正面の鏡部分には梅鉢紋に「宮元村」の文字を配しています。

金幣

御幣のうちで紙垂の紙部分を金属に替えたものを金幣といいます。元々は神への捧げものを意味していましたが、神の依り代・祓具などの意味ももつようになりました。また金幣より先は神域であるという考えもあるそうで、来年露盤に道真公の御神影を彫らせていただくので、ふさわしいと考え金幣を採用しました。

井筒端

井筒の端の突き出た部分の木口装飾金具で、全部で８か所あります。正面部分には向かって左右それぞれに、津田大年神の御神紋「左三つ巴」・賀茂別雷神の御神紋「二葉葵」を配し、側面は右に構のダカとして親しまれる「猿田彦大神」、左にその夫人である「天鈿女命」の面を配しています。また下場には太陽・月を表す「金烏」・「玉兎」を置いています。

「左三つ巴」

「二葉葵」

「猿田彦大神」

「天鈿女命」

「金烏」

「玉兎」

幕掛金具

井筒の幕掛け部分の装飾金具として「十二支」を配しました。それぞれ方角・一日・一年・一生を表す意味があり、綿々と続き無限につながるという願いも込めています。

水引幕

水引幕の図柄は「阿・吽の追い龍」で旧屋台の幕の図柄を継承していますが、炎の部分に色糸を使い前のものより鮮やかな仕上がりになっています。また中央部分を括りあげ易くするため、胴部分が渦の奥に隠れたようなデザインになっています。なお龍の牙や爪は旧屋台の幕から引き継いだ象牙を使用しています。

高欄掛

屋台の乗子が座る高欄の四面に飾られる刺繍装飾を高欄掛といいます。
今回新調のものは四共図柄を変えましたが縁取りには旧屋台のものと同様に剣菱模様が施されています。

高欄掛（安倍泰成　九尾の狐退治）

九尾の狐＝玉藻の前は中国殷王の后・妲己、天竺の王子の妃・華陽夫人、西周王妃・褒姒に化けた妖狐。日本に来て鳥羽上皇の寵愛を受け「玉藻の前」と呼ばれるようになります。その後鳥羽上皇は原因不明の病に伏せるようになり、医師も匙を投げます。陰陽師・安倍泰成は鏡にその姿を映し、真言を唱えて玉藻の前の正体を見抜きます。変身を解かれた玉藻の前は九尾の狐の姿となって宮中を脱走しました。今回、この図柄を採用するにあたり狐の姿を映しだした鏡は北角和久氏・作の錺金具を使用しています。元絵は歌川国芳の浮世絵です。

参考元絵

高欄掛（宮本無三四　山鮫魚を殺す）

江戸時代にヒットした小説「繪本二島英勇記」を題材に歌川国芳が浮世絵にしたものを元絵にしています。
山鮫魚とは湿った落ち葉や川辺の朽ちた葉などが化け物となったもの。
村人が鉄砲でも倒せなかった山鮫魚を通りがかった宮本武蔵が目を突き刺して退治したという話です。
宮元武蔵は播州ゆかりの武士。

参考元絵

高欄掛（俵藤太＝藤原秀郷 大百足退治）

琵琶湖・瀬田の唐橋に大蛇が横たわり、人々は恐れて渡れなくなっていました。通りがかった藤太は臆することなく踏みつけて渡ってしまいます。すると大蛇は人に姿を変え、藤太に一族を苦しめる三上山の百足退治を懇願します。藤太は弓をつがえて矢を射るも一の矢・二の矢は跳ね返されてしまいます。三の矢に唾をつけて射るとようやく百足は退治されました。藤太は藤（藤原氏）の太（太郎＝長）の意。平将門の乱を鎮圧した武将として有名です。源氏・平氏と並ぶ武家の棟梁です。
元絵は歌川国貞の浮世絵です。

参考元絵

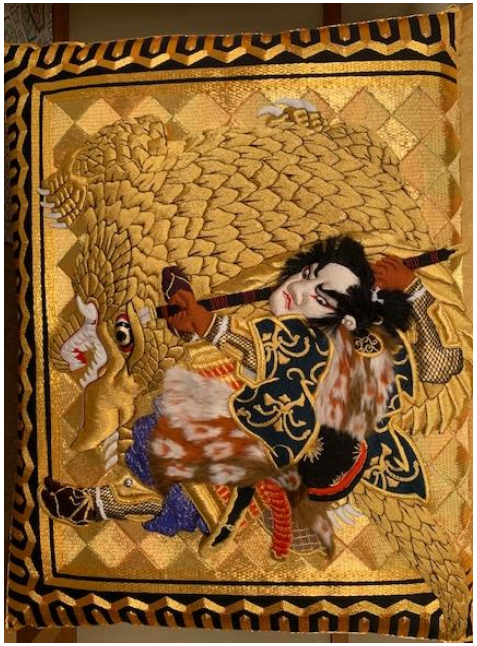
高欄掛　（平惟茂　鬼女退治「紅葉狩」）

平惟茂は平安末期の武将。信州戸隠山に狩りに入った惟茂は身分の高そうな女たちが紅葉を愛でながら酒宴をしているところに出くわします。
誘われるがままに酒宴に加わった惟茂は酔って寝てしまいます。
夢の中で美女の正体が鬼であることを神に告げられ、目覚めた惟茂は鬼を退治します。
元絵は歌川国芳の浮世絵で、この題材は昔から屋台装飾のモチーフとしてよく使用されます。

参考元絵

高欄掛け　配置

進行方向

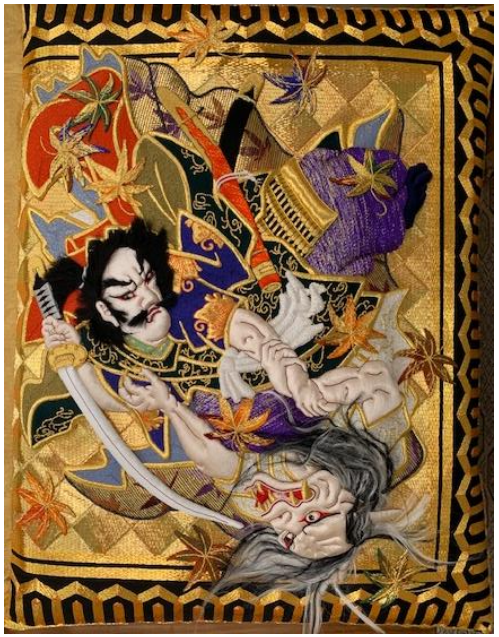


●宮本無三四　山鮫魚を殺す

●安倍泰成　九尾の狐退治

東　南　北　西

●俵藤太　大百足退治



●平惟茂　鬼女退治

乗子襦袢・頭巾

旧屋台の乗子襦袢には阿・吽の龍虎が刺繍されていましたが、今回の新調にあたり構青年会のシンボルである「若」の文字と道真公ゆかりの「梅」と鶯をあしらった図柄を刺繍しました。
鶯の目には旧屋台の垂木端の珊瑚を使用しています。
頭巾は旧屋台時と同じく白地に金糸で「構」の町名を施しています。

伊達綱

従来の茶金を継承し、屋台のサイズを大きくしたことに伴い、太さを太くしています。

幟

今回の新調にあたり「構」の書体を法被・頭巾等の書体と統一しました。

梅鉢紋と宮元村の文字はそのままに振れ止めの房を新たに取り付けました。

天井

出雲大社の本殿天井絵の「八雲の図」を参考にしています。八雲といいながら七つの雲しか描かれていない同図は多くの謎に包まれています。一番大きな雲は「心の雲」とされ、一カ所だけ黒を使った部分があり、ダルマの目入れのように一番最後に墨を入れる際に天下泰平などを祈る「心入れ」が行われたと伝えられています。

出雲大社の天井絵をモチーフにしたのは、菅原氏はもとは土師氏と称し相撲の始祖である野見宿祢を祖とする出雲出身の一族であり（曽祖父・古人の代に大和の菅原郷に移り住んだので菅原姓になりました）道真公一族の故郷・出雲にちなんだためです。また、露盤に道真公の御神影を彫らせていただくので雲の上は天上界であるという意味も込めています。

太鼓

太鼓は皮が張られている部分を「鏡」、本体を「胴」といいます。鏡面の直径を「うたくち」といい、通常太鼓の大きさは「うたくち〇〇寸」というふうに表現します。太鼓の胴には主に欅材が用いられます。今回の太鼓はうたくち二尺八寸の欅材製です。また、旧屋台の太鼓は播州地方でも最も古いもののひとつで「天保十四年」の墨書きがあります。構町の宝として大切に保管しています。